

「神宮前五丁目地区まちづくりに向けた有識者会議」(第3回)

議事要旨

- 日時: 2022年4月7日(木)17時00分～18時30分
- 場所: 東京都庁 第一本庁舎 33階北塔 N4 会議室
- 出席者: (現地参加)中井座長、伊藤委員
(オンライン参加)朝日委員、越塚委員、小林委員

■ 議事概要

□ 取りまとめの方向性

【伊藤委員】

- 神宮前五丁目地区のまちづくりの方向性としては、地域特性を踏まえることも重要だと考えるが、取りまとめとしての位置付けについて教えてほしい。「まちづくりの基本的な取り組み事項」「地域特性」「ポストコロナのまちづくりの視点」の3段階構成となるのか。

⇒【事務局】

- 資料24ページには、地域特性、都の上位計画、ポストコロナの視点が書かれている。

⇒【中井座長】

- 地域特性の分析が十分であるかは気になる点なので、もう少し深く分析していただくとよい。
- 最終的なアウトプットイメージがまだ共有できていない中ではあるが、ビジョン・構想を取りまとめながら、基本計画の入口程度までは触れるようなイメージか。

⇒【事務局】

- 大きな方向性というところ。今までの議論で使用した資料にコメントを入れるなど、アウトプットは様々ありうるのではないか。

【朝日委員】

- 上位計画上での位置付け・方針が様々あるが、それぞれの繋がりを教えてほしい。特に国際ビジネス交流ゾーンとの関連、中枢拠点としての渋谷の位置付けが、本対象地のまちづくりの方向性にどう絡むのか気になる。
- 視点②「Flexible」の整理の仕方が気になる。視点②「Flexible」においては、当初、将来の不確実性への対応という捉え方だったと思うが、視点①「Well-being」は、従来のような機能分担を前提とせず、ホリスティックな意味での幸福度を捉える考え方だと認識しており、それと考え合わせると、ひとりひとりのライフスタイルの多様性を捉える意味合いもあると感じた。「Flexible」という言葉でよいか、ということも含めて議論したい。

⇒【事務局】

- 国際ビジネス交流ゾーンの位置付けについては、オフィスのような国際ビジネスに直結する機能だけでなく、それをサポートするような住宅などの機能も含まれた考え方である。

⇒【中井座長】

- 「Flexible」という言葉についてはご議論いただいて、適切な言葉があればと思っている。

⇒【越塚委員】

- 視点②「Flexible」については、「Diversity」が近いと感じる。環境的にも人間的にも多様であり、様々な事柄にアダプトできるイメージ。それが東京の最大の特徴でもある。
- 視点③「Digital&Real」に関連して、イメージの図は、リアルなレイヤーとバーチャルのレイヤーの双方が表現されるとよい。リアルでの実現が難しいことはバーチャルで実現させ、相互補完・役割分担することで高機能化していくイメージ。

⇒【中井座長】

- イメージのご提案に違和感はない。

【小林委員】

- 提示いただいた資料に特段の反対意見はない。
- 視点②「Flexible」については、行政主導のまちづくりで実現可能なかどうかという点も念頭に、取り組みイメージの具体化が必要。
- 視点③「Digital&Real」について、まずバーチャル空間を作り、まちづくりの選択肢が可視化され、その中からリアルで実現するものを選択するという方法をとると面白いと思っているが、そのような考え方はあり得るのか。
- 場所の固有性について、青山病院や酸素・医療提供ステーションとしての文脈があるなかで、医療・保健的な要素は考えなくてよいのか。

⇒【事務局】

- この場所の医療・保健的な文脈については、視点①「Well-being」の視点に関連するのではないかと考えている。具体的な機能については、実務者による検討段階で議論したい。

⇒【越塚委員】

- 視点③「Digital&Real」については、おっしゃる通りのイメージで、従来のリアルのコピーをデジタルに作るどころから一歩進んで、リアルとバーチャルの順番を逆転させると新しく意義深い取り組みになると思われる。不動産ビジネスなど、マイクロレベルでは取り組みが始まっており、都市計画スケールでどう展開できるかといった議論はメタバースの分野で活性化している。

□ 計画地で想定される具体的なイメージ・実務者による検討において整理すべき事項

【伊藤委員】

- 視点②「Flexible」については、本日の資料では将来の不確実性といった長期的な時間軸での意味で捉えられているが、平日と週末での変化など日常的な時間軸での変化を受け止める空間のフレキシビリティという意味も入っているとよい。多様な人・ライフスタイルといった意味合いであれば「Diversity」というワーディングがよいと思うが、空間のフレキシビリティのようなことと考えると、両方可能性があると考える。

⇒【中井座長】

- 例えば広場は様々なことに活用できるフレキシブルな空間だと思うが、建物としてそのように上手く使っている事例はあるか。

⇒【伊藤委員】

- イメージだが、例えば住宅の場合は機能のはっきりしている部分の他に自由に使えるスペースを確保しておくといった作り方はあり得る。また、少しレベルが異なるが、前に小林先生がおっしゃっていた劇場設備について、

いろんな機能(高機能な設備)を詰め込まず(完備するのではなく)、シンプル(必要最小限のスペック)に作って基本的に持込対応とする話もある種のフレキシビリティだと捉えている。

【越塚委員】

- 視点①「Well-being」と視点②「Flexible」「Diversity」について。例えば、東京大学の本郷キャンパスは面白い場所で、いわゆる大学の機能の他に保育園などが複合しており、働いている近くで赤ちゃんが歩いたりするが、対して東京のオフィス街だとサラリーマンしかない。こういう状況は社会としてすごいびつで、コロナを受けた在宅勤務等の経験によりみなさん感じているところだと思われる。家庭に戻ってみると、年代も性別も異なる人がいるなかで仕事をして、隣に子供がいる中でハラスメントも減っていく。そう考えると、フレキシブルでダイバーシティとなることと、正常な社会となりウェルビーイングが向上することは、密に関係しているという感覚がある。そう捉えると、主要な業務商業地である渋谷に、こどもの城という施設があったことは、本当はすごくウェルビーイングだったのではないかと感じている。
- 視点③「Digital&Real」について、私は東京でスローを実現すべき、スローのためにデジタルを使うという視点があるとよいと考えている。デジタル＝効率化のイメージがあるかもしれないが、それはデジタルという手段の活用方法のひとつであり、デジタルの活用により実現できることは様々である。

【朝日委員】

- デジタルでスローを実現することについて、面白い話だと感じた。
- 視点①「Well-being」に関して、コロナに加えて、人口減少で様々な場所で働き手が不足しているという要因のなかで、働く・住む・遊ぶの境目や場所の機能分担がなくなってきている。この傾向から考えるに、これからは一体的・ホリスティックに計画していかざるを得なくなっているということと、そもそも社会の在り方としてその方が健全であるという、両面があると捉えている。この際に重要なのは、交通や物流など、バックヤードとされてきた人々の活動を支える部分についての議論である。まちづくりのなかで、使い手とそれを支える働き手の双方が幸せになる方法を、もう少し明示的に取り組む必要があると考えている。

【小林委員】

- デジタルでスローを実現することはよい考え方だと思った。
- 視点②「Flexible」については、例えば平日と週末、あるいは5年後10年後みたいなことで考えていくと、運営面での議論も必要だと感じた。日常的にフレキシブルな使われ方をするには、従来のリーシングの方法では不十分で、積極的なコーディネートや、物流などのバックヤードの仕組みを考えていく必要があると感じた。

⇒【中井座長】

- 次世代型のエリアマネジメント(以下、エリマネ)をイメージした。これにはデジタル空間・技術も含めた議論が必要である。

⇒【伊藤委員】

- デジタルを使って、リアルな文化体験を繋いでいく豊岡演劇祭の例は、デジタルも駆使した次世代のエリマネに参考になりそう。つくる段階から使い手の顔が見えてくると、この場所ならではの取り組みが考えられるのではないかと。今整理しているまちづくりの視点をどのようにこのエリアに落とし込んでいくかが、もう少し見るとよいと感じた。

⇒【朝日委員】

- 多様な事柄を受け止めることと、即地性・場所の力との折り合いのイメージがまだできていない。バッファーとして可能性・余地を残しておくということが、フレキシブルに活用できる空間づくりの手段のひとつとして考えられる。そのような空間の代表例は都市開発で作られる広場だが、ただ存在するだけでは上手く活用されないことが分かってきた。エリマネの話もあったが、多様な活動を促すには、空間形成とマネジメントをセットで考えることが重要である。その際には、何でも受け止められることも大事だが、渋谷の文化を踏まえて一定の色付けをしていく事が必要だと思われる。

⇒【小林委員】

- 非常時にフレキシブルに対応可能という要素は残しつつ、この場所の文化を念頭に置いて使い手のイメージをもう少しはっきりしておく必要があると思っている。

⇒【中井座長】

- 委員の方々のご意見をまとめると、非常時は当然として、平時についてはユーザーを想定しながら考えていった方がよいということだと思う。周辺のまちのことを念頭に考えていくと、自然とこの場所ならではの要素を含んだ議論になるのではないか。
- 視点②「Flexible」のワーディングについては、委員の方々のご意見を踏まえて工夫が必要で、今までの議論から考えると「懐が深い」という意味合いが一番近いのではないか。将来の先端技術を使いながら、東京あるいは世界で初めてのことを実現する気概で取り組むレベルのことを、有識者会議としてはまとめていきたい。

【越塚委員】

- リアルに対するバーチャルというワーディングだが、現実世界で実現できないことを実現するという意味で、“アンリアル”と表現するとよいのではないかと最近は感じている。大きな柱というよりもコンセプトの一つに入っているとよいと思った。

【中井座長】

- 本日の議論は事務局にまとめてもらい、次回改めて議論できればと思う。

⇒【事務局】

- 次回は本日議論したポストコロナのまちづくりの視点をさらに整理したものと、都民の城に関わる議論をお願いしたい。

以上